

高度情報社会における 情報過剰の問題（Ⅱ）

村上 則 夫

目 次

1. 序 言——問題の所在と提起——
2. 「高度情報社会」と称される現代社会
3. 高度情報社会と情報メディア
 - (1) 日常生活と情報環境
 - (2) 高度情報化とメディア（以上第29巻第1・2号）
4. 高度情報社会における今日の問題
 - (1) 「今世紀」から「21世紀」へ
 - (2) 現代社会の「影」の思索
5. 高度情報社会と「情報過剰」
6. 「情報過剰」と「人間」の問題
7. 「情報過剰」への対応と課題
8. 結 語——若干の展望——（以上本号）

4. 高度情報社会における今日の問題

- (1) 「今世紀」から「21世紀」へ

今まさに今世紀が終わりを告げ、21世紀高度情報社会という舞台の緞帳^{どんちよう}

が上がろうとしている。通常の芝居であれば、一筋のスポットライトが舞台の一隅を照らし出し、そこに一人の役者の姿が浮かびあがる。やがて、その役者がスポットライトと一体化して歩を進め、ほぼ舞台中央に足を置いたところで舞台全体が瞬時に明るくなる。我々観客は、この舞台の進行を客席から期待を込めて観劇する。大道具・小道具や役者たちの役柄に似合う衣装に目をとめ、台詞に耳を傾け、様々な演技に酔う。時には共感しながら、また、時には拍手をもって観劇し続ける。そして、十分満足した芝居であれば、緞帳がおりた後もなかなか席を立ち難く、改めて手許のパンフレット等を見直して役者の名前を目で追ったりしている。

だが、「高度情報社会」と称される現代社会では、人間が「生」を営む舞台はあっても客席はない。人間はみな舞台の上にいる。今日、21世紀高度情報社会という舞台の開幕に向けて、着々と準備が整っているかのように見える。21世紀高度情報社会へ向けて「マルチメディア」という言葉が魔力をもった「光」の矢のように日常生活に照射し、“インターネット”、“ヴァーチャルリアリティ”という言葉が日常的な会話の中で語られぬ日はない。まさしく、社会のなかで、人類の希望に満ちた“夢”を実現するといわれるハードウェアやソフトウェアの商品名が乱舞しているのである。それは、ひと頃我々の注目を集めた「ニューメディア」という用語を遥かに凌いでいる。

ネイスビッツは、「共産主義が崩壊し、民族国家が形骸化し、市場統合の進展、民主主義の拡大及びテレコミュニケーションの新たな革命が始まったいま、個々人、家族、企業及び団体の成功の機会と可能性がいついかなる時よりもはるかに大きく膨らんだ³⁵⁾」として、21世紀の世界を構築する基盤となるのが、他ならぬテレコミュニケーション革命であることを強調している。しかしながら、最新技術によって開発された高性能のコンピュータが華麗に活躍する「電子化」された社会、個々人がそれぞれ高度で多彩なメディアを所有し、望む時間に自由自在に情報ネットワークにアクセスする行動によって、来る21世紀において人間の顕在的・潜在的能

力が一層開放され、人間一人ひとりの幸福度が高まり、人類がこれまで味わったことのない「豊かな」社会が実現されるであろうと疑わない者は、果たしてどれだけいるだろうか。どれだけの人間が、そうだと信じられるだろうか。恐らく、明確に、或いは漠然とながらも、その秘めた危うさや恐れを引き起こす暗い「影」の存在に誰もが気づき、悪しき幻想をまき散らしているだけではないかと慢性的な不信感や警戒感を高めている、というのが実情ではないだろうか。

世界全体は、そして社会システムは確かに進歩・発展しているといえるかもしれない。例えば、既に沢山の情報関連機器が社会に広く普及し、様々な形で利用されている。幼稚園児がパソコンの明滅するモニター画面上のカーソルを目で追い、小学生がポケットベルを持ち歩き、かつ又老人たちがパソコン通信で全国的な趣味のネットワークを形成するという形で日常生活の場が次々と変容し、急速に真新しい風景に都市が彩られる。それにもかかわらず、「次の時代の像はみえてこない。あるいは、かすかに見えているのは、不思議な『廃墟の影』³⁶⁾」であり、まったく奇妙としか言いがたい。やや誇大に響くかもしれないが、華麗な言葉が光れば光ほど、輝きを増せば増すほど、我々を脅かす不気味で不可解な「影」が色濃くなってくると表現してもよいのである。哲学者である中村氏はいう。21世紀を思うとき、「いちばん基礎的でかつ即物的なこととして考えざるをえないのは、果たして人類はこの世紀を生き延び得るのだろうか、という深刻な問題である³⁷⁾」という言葉に、我々は、如何に今日の事態が危機的で破滅的な状況にあるかを知るのである。

(2) 現代社会の「影」の思索

かつて、「海図のない時代」という言葉があった³⁸⁾。今日もまた生きるに難しい時代である。

人間の「知」を結集したはずの様々な試みの結果が、より一段と現行のシステムを混乱させ、軽くあしらうことのできない新たな問題を噴出させ

てしまう。「問題群」を破壊するはずの「知」の刀はボロボロに刃こぼれし、人間が生きるに値する「生」を生きることが危機的な状態にあるといえる。「生」そのものが奪われる恐怖の予感である。今日の人間をめぐる問題が、ますます(a)巨大化・長期化、(b)複合化・重層化し、(c)人為的・人工的性格を増大させているとともに、(d)身近化・日常化し、更に(e)内面的・精神的領域にまで食い込んできているのは明らかである³⁹⁾。

山岸氏は次のように指摘する。「現代は、人間が（全体的）人間として生きていくことがきわめて困難な時代なのだろうか。現代の社会学、哲学、文学をたがいに関連づけながら人間とその世界について考える時、私たちは、現代の時代状況と生活現実にみられる亀裂・解体・流失・喪失を私たち自身の日常的経験の深みにおいてとらえることができる⁴⁰⁾」と。むろん、氏の指摘は大人だけに該当するものではない。実に、現代の子どももまた孤立化し苦しみもがいている。子どもがより人間的に生きる人になりかねている。人間的に生きる人になろうとして、子どもなりに試行錯誤し、いじらしくも悪戦苦闘している。「金のような抽象物を媒介とした合理的だが冷たい人間関係、パトスに裏づけられない人間関係の中にある親たち、その孤独さは、子どもの社会性の形成にひどい打撃をあたえている⁴¹⁾」という大田氏の指摘は、氏の深い嘆きとも、大人たちへの警告ともとれる。まさしく、現代では人間の「生」の讃歌よりも、命あるもののすべての明日の「生」の危機、地球というシステムそのものの危機を憂慮するため息が響き渡り、いまや危機の直視と根本的反省、そして具体的対応のあり方が迫られているといえる。

現在、我々が直面している人間社会の持続の危機を便宜的ながら区分すれば、具体的には、社会・人間の危機と自然の危機として表現できよう。前者の社会・人間の危機は、社会システムの危機であり、人間の生命の危機である。これは、飛躍的に発展を続ける科学技術の意図的悪用や常識を逸脱した意図せぬインパクトが危機の要因となったり、或いは又、国家間の戦争時の軍事兵器の使用、世界の各地で起きている民族紛争、国家その

他の人間集団による暴力行使、銃や毒ガスなどを用いた嫌悪すべき凶悪な犯罪行為、巨大事故の発生等により社会システム、そして人間の生命は危機に直面しているのである。我々の日常生活においても、生命の危機は特別な出来事ではない。戦後以降では考えられないほど、非常に身近な出来事として、何ら予告なしに、しかも音もなく襲いかかる突然の生命の危機に遭遇する場面が増えている。

後者の自然の危機の方は、近年世界的に大きな関心事項となっている地球的規模の自然環境破壊や天然資源の枯渇等がその代表的な例である。このような現在の自然の危機は自然からもたらされたものでない。これらの危機の背後には人為があり、世界的に拡大化し続ける社会・経済的關係など種々の要因が複雑に錯綜して存在している。その意味でも、自然の危機もまた「人間」の存在なしには語れない問題である。取り分け、地球的規模の自然環境破壊という特筆に値する極めて危機的な負債は、現代に生きる我々の世代が支払うだけに止まることなく、後に続く世代にまで受け継がれるであろうとする深刻で悲痛な思いが、心の叫びとなって迫っている。現代に生きる我々は、未来の人々を幸福から引き離すことに大きな手助けをしているのである。細菌学者で生態学者であったデュボスは、1980年に刊行した著書『地球への求愛』(*The Wooing of Earth*)において、「多くの人びとは、地球にもたらされた損害の多くはあまりにもひどすぎて、今となっては取り返しがつかないと考えている。幸いなことに、生態系は外傷的な損傷から立ち直るきわめて強い回復力を持つので、この悲劇的な考えは当たらないだろう⁴²⁾」。「人類と地球の幸福にとっての私たちの知識と責任感をもってすれば、生態学的に健全で、美的に満足がゆき、経済的に報いがあり、そして文明のひき続く生長に好ましいような新しい環境を作り出すことができる⁴³⁾」と主張した。

しかしながら、従来は自然環境破壊の問題といえば、産業・企業等による犯罪まがいの無計画・無謀な大量の廃棄物投棄、或いは企業の利潤追求に伴う天然資源の飽くなき収奪等が主要因であったが、今日では日常生活

に基づく一人ひとりの環境破壊や汚染等が進み、全体的にはもはや無視し難い状況を呈している。もし、デュポスが現在も存命し、今日の自然環境破壊の惨状を目のあたりにしたら、恐らくもっと悲観的な見解を口にして嘆いていたかもしれないのである。

あえて、ここで強調するまでもなく、人間は環境から完全に遮断された個室では生きていけない。人間は、その基本的な存在様式からして、「他者」との接触を必ず必要とする。人間を人間たらしめるのは、自己そのものではなく他者とのかかわりにおいてである⁴⁴⁾。従って、人間の形成・成長段階において、人格的な人間関係の喪失、人間相互間におけるコミュニケーション不足やいわゆる「双方の接触障害」などが深刻な問題となるのはむろんのこと、自然が破壊されて野山に咲いていた鮮やかな色の草花が無残に枯れはて、また虫の羽音や空を舞う小鳥のさえずりが消えて、人工的な「騒音」という意味のない不快な情報だけが増大する環境のなかにいけば、一体人間の感情や感性はどのようになるのだろうか。適確な表現でないことを敢えて許していただければ、自然という「他者」の破壊は、それとかかわる人間の内なる、深層部分の自己をゆがめ破壊しかねないのではないかと考える。

いずれ、上述した社会・人間の危機にしる自然の危機にしる、人類はむろんのこと「生」あるすべてのものの存続の危機であることは疑問の余地が無く、このような問題の根源は、双方とも他ならぬ人間の存在のための種々の営み、社会の進歩・発展に起因することにまったく変わりはないのである。

人類は、まもなく今世紀に別れを告げ、21世紀に歩もうとしつつある。本来であれば、まだ見知らぬ未来に多少の不安を秘めつつも明るい希望と深い期待感をもって、次の世紀へ足を踏み入れたいと思わぬ者はいないだろう。今の世紀が不安であり悲惨であればあるほど、逆に次の世紀への希望と期待感が高まる。しかし、21世紀高度情報社会という舞台が開幕する、ここに至って、我々の未来社会への常識はどんどん崩れ、不確実性、不透

明性及び複雑性が拡大しつつあるといえる。現代に生きる人間が、未来に向けて希望に満ちた輝かしいメッセージを発し得ないのは、実に悲しく嘆かわしいことである。かくして、現時点で人類を悩ませている社会の深刻な「影」の部分、そして、じわじわと忍び寄りつつある「影」の部分、更に将来的に人類を陥れるであろう悲劇的な「影」の部分を捉えることは、極めて重要な意義を持っているといえよう。

但し、ここでは、本稿の論旨から大きく逸脱しかねないことから、現代社会の「影」の思索そのものについては改めて別稿で検討することにし、以下では、主に社会・人間の危機の領域に含め得る現代社会の「情報過剰」という現象、そしてこの情報過剰に伴う諸問題について、我々の視線を絞ることにしたい。

5. 高度情報社会と「情報過剰」

「情報」は、いまや世界から華麗な“アイドル”として、その熱い視線を集めている。

各種のメディアが高度化、重層化した「高度情報社会」では、先ずもって情報の価値の必要性和重要性に対する認識が広く行き渡った社会であり、文字・数字、音声のみならず画像・映像という多種多様な形態での情報を大量に、かつ時間と空間を超えて瞬時に交換されたり提供される社会として表現できる。むろん、そのような情報の流通、貯蔵（蓄積）には最新の情報技術を駆使した常識を越えたメディアの華々しい活躍を抜きには語れない。我々の職場や家庭だけでも、衛星放送も受信可能なテレビ、ラジカセ、マルチメディア・パソコン、VTR、コードレスホン、ファックス、ワープロ、ポケットベル及びCATVなど多くのメディアが目の前におかれ、故障知らずの働き者として大いに活躍している。まさしく、「情報の豊かな」社会なのである。より正確には、「情報量の豊かな」社会であり、「メディアの豊潤な」社会である。人間社会の営みの過程に登場する情報

が人間の素敵なパートナーとして華々しく活躍し、人間のより高次の欲求を充足させ、ある主の魅力をその身にまとった情報は熱狂的に現代の若者の間でもてはやされ、非常に高い価値を有したもので、つまり、一種の“アイドル”としての地位にあるといっても、あながち誇張とはいえないだろう。

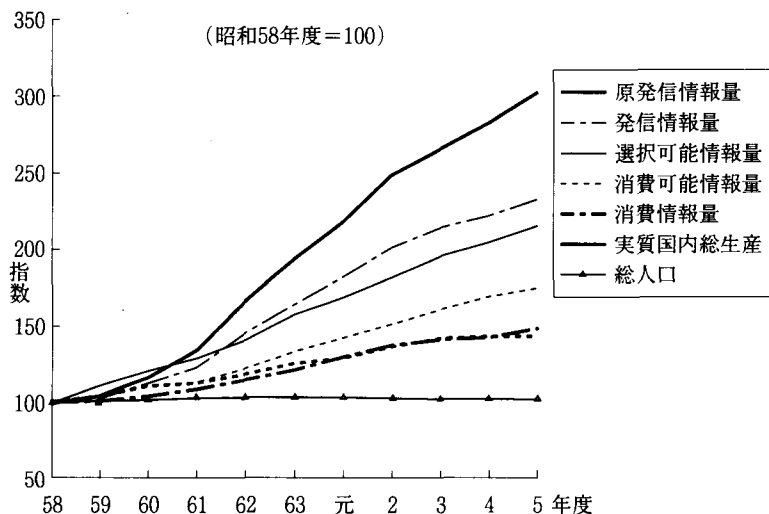
しかしながら、現在に至って、この情報が素敵なパートナーとしての役割を演じるとともに、人間や社会に無用な危機を誘起したり、混乱に陥れる苦悩の種ともなることを、我々ははっきりと気づきはじめていたのである。つまり、社会を流れているすべての情報が人間及び人間社会にとって、本来の意味で必要な情報、有益な情報とは限らない。有害で多分に不正確（悪意のある歪みも含めて）な情報が、不要な社会的混乱と恐れを惹起し、一人ひとりにとって本当に有益で必要な情報を見えなくし、或いは正確で適切な情報の流れを妨げる恐れは多分にありうるのである⁴⁵⁾。ポストマンは、「情報はその行き場が無いとき、情報が適用される理論がないとき、情報がぴったりに合う雛型がないとき、情報が役立つより高い目標がないときは危険である⁴⁶⁾」と警告し、我々は「文化が情報不足のためにひどく病んでいるのではないかと思っている。むしろ、その通りである。同時に、文化が過剰な情報、意味のない情報、コントロール・メカニズムなしの情報のためにひどく病んでいることもまた、いまようやく理解されはじめたばかりである⁴⁷⁾」と指摘しているように、現在、我々が抱えている苦悩の種は情報過少、情報不足ないし情報欠乏ということにはない。現在突き付けられている問題は、まったく逆である。つまり、好むと好まざるとにかかわらず、科学技術によって生み出されたあらゆるメディアから絶え間なく提供される様々なレベルの情報の洪水に、かつ又「情報氾濫」、「情報爆発」と呼びたいほどの過剰な情報の激流に人間社会が襲撃され、そして「人間」存在そのものを見失おうとしている。そして、このような状態にますます拍車がかかり限度を知らない。ボードリヤールは、著書『シミュラクルとシミュレーション』（*Simulacres et simulation*）のなかで、

「コミュニケーションの大きかりな演出の裏で、マスメディア、情報は猛烈に、社会体を立ちなおるすきも与えず破壊する⁴⁸⁾」と説いているのである。

過去30年間に蓄積・保管・組織化された情報量は、有史以来蓄積された情報量より大きいといわれているが⁴⁹⁾、歴史的に情報量が増大していく傾向を示す分析が至るところで明示されている。例えば、ポストマンによれば、情報の爆発的な増加以前にはイングランド全体で34の学校があったが、1660年には12平方マイルごとに1校ずつ444の学校があった。公立小学校の急速な発展には幾つかの理由が考えられるが、それが束縛を受けない情報の引き起こす不安と混乱に対する避けがたい応答であったことは実に明らかである、と述べている⁵⁰⁾。そして又、現代の「情報でない情報の爆発」(non-information explosion)——即ち、“本当は「情報にあらざるもの」の爆発”——状態を説いているワーマンは、米国では毎年およそ9,600種の様々な定期刊行物が発行され、毎週発行される一冊の『ニューヨーク・タイムズ (The New York Times)』には、17世紀の英国を生きた平均的な人間が一生を通じて出会うよりも沢山の情報が詰まっているなど⁵¹⁾、進展しつつある情報技術、近年の情報量の増大傾向及び如何に現代に生きる人間が膨大な情報に取り囲まれているかについて、身近にある具体的な数字を明示して指摘している。

我が国での雑誌、郵便、電話、テレビ、ラジオ、パッケージ系メディア (CD、ビデオソフト等) など各種のメディアを通じて社会に流れている情報量を共通の尺度 (情報量の計量単位は日本語の単語数を表わす「ワード (語)」を利用) で計量している郵政省の「情報流通センサス」によると⁵²⁾、1983年度から1993年度までの推移では、原発信情報量、発信情報量及び選択可能情報量の伸びが著しく、1993年度はそれぞれ基準年である1983年度の3.02倍、2.33倍、2.16倍となっている。他方、我々が実際に消費した情報量、即ち、消費情報量の方は原発信情報量等の伸びには到底及ばないとはいえ、緩やかながら増加する傾向をみせている (第5-1図参

第5-1図 「情報流通センサス」による情報量の推移



(5年度分)

(単位：ワード)

	全メディア [対前年度比%] (58年度比)	電気通信系 [対前年度比%] (58年度比)	輸送系 [対前年度比%] (58年度比)	空間系 [対前年度比%] (58年度比)
原 発 信 量	7.05×10^{15} [7.0] (3.02倍)	4.69×10^{15} [11.1] (31.23倍)	4.93×10^{13} [2.4] (2.62倍)	2.32×10^{15} [-0.3] (1.07倍)
発 信 報 信 量	9.93×10^{15} [4.8] (2.33倍)	4.69×10^{15} [11.1] (31.23倍)	2.92×10^{15} [-0.2] (1.49倍)	2.32×10^{15} [-0.3] (1.07倍)
選 択 可 能 量	3.53×10^{17} [5.8] (2.16倍)	3.40×10^{17} [6.0] (2.25倍)	2.78×10^{15} [-0.5] (1.50倍)	9.80×10^{15} [-0.2] (0.98倍)
消 費 可 能 量	7.37×10^{16} [3.8] (1.73倍)	6.11×10^{16} [4.6] (1.99倍)	2.78×10^{15} [-0.5] (1.50倍)	9.80×10^{15} [-0.2] (0.98倍)
消 費 報 費 量	1.92×10^{16} [3.7] (1.49倍)	1.19×10^{16} [6.5] (1.89倍)	9.28×10^{14} [2.5] (1.94倍)	6.38×10^{15} [-0.9] (1.05倍)
情 報 報 報 量	1.51×10^{15} [4.9] (1.59倍)	2.05×10^{14} [10.8] (3.94倍)	1.31×10^{15} [4.8] (1.45倍)	5.36×10^{16} [-0.4] (1.04倍)

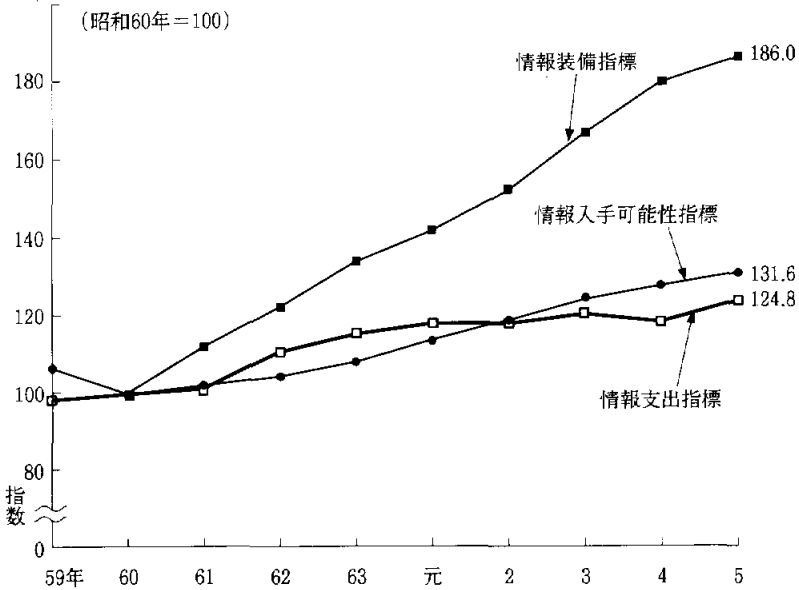
(出所) 第5-1図～第5-2図は、郵政省編『通信白書』(平成7年版)、大蔵省印刷局、1995年より(第5-1図は104-105頁、第5-2図は130頁)。

照)。それから、我々の日常における高度情報化の進展を理解する一例として、「家庭の情報化」指標の動きの方も参考にみることにしよう。第5-2図は、情報入手手段の多様化、各種のメディアからの情報提供及び情報入手のために支出した費用という3つの側面から、それぞれ情報装備指標、情報入手可能性指標及び情報支出指標として捉えたものである。このうち、図に示されている情報装備指標は、情報通信機器の保有数と情報ネットワークへの加入率により構成されているが、1985年を基準年とした1993年の指数は対前年比で6.1ポイント増加し186.0となっている。これは、情報通信機器の保有数の増加が主な要因となっているが、今後は徐々にではあるが家庭の情報ネットワークへの加入率も高まるであろうことは容易に予想し得るところである。

社会的世界は、その大部分が可視的ではない。個々人が各種のメディアの利用によって入手できる様々な情報によって、分析・解明された諸現象を知り、日々刻々と変化・変容する現実の世界の姿を捉え理解することができる。

しかしながら、ここで、あえて詳細な統計データを厳密に列挙するまでもなく、日々の生活で毎日配達される新聞、街の書店に山積みされている表紙も鮮やかな書籍や雑誌類、そして好むと好まざるとにかかわらず、テレビ、ラジオ、ダイレクトメール、更には電話やファックスなどから流れ出る様々な情報によって、理屈ではなく、もはや実感として日常的に自分たちが非常に多様性に富んだ膨大な量の情報に取り巻かれ、ハイスピードで飛び交い、渦巻き充滿していることを無条件に認めざるを得ない状況をきたしている。人間が消化（摂取）できないにもかかわらず、如何に情報が過剰に生産され、供給されているかを知るのである。日々の生活において、知らない方（＝情報を得ない方）がのん気で平安のうちに過ごせたのに、知らされた（＝情報の提供を受けた）が故にかえって気になり、あらぬ心配をし、気をまわす。そして、その結果によっては知ることによる身の不運を嘆くことになりかねない。もし、すべての情報に“音”があった

第5-2図 我が国の「家庭の情報化」指標



郵政省の委託調査により作成

としたら——但し、「音」も情報の一種類であるが——，あらゆる人間は様々な音が混濁した，一種の「騒音」に一瞬たりとも耳を塞いでいる両手を放すことができないであろう。むしろ，「騒音」であれば，例えわずかでも人間の正常な判断を狂わせ不愉快をもたらすのに十分である。パスカルは次のようにいう。「世の最高の裁判官の精神も，周囲の騒音ですぐにみだされぬほどに独立したものではない。彼の考えを妨げるためには大砲の音をさせる必要はない。風見の音か滑車の音でよいのだ。彼がいまよく推理できなくても驚くことはない。はえが一匹彼の耳のそばでうなっているのだ。彼がよい裁断をくだせないようにするには，それで十分である⁵³⁾」と。

総じて，我々の日常生活において，情報量が急激に増大し絶えず情報が渦巻き溢れ，人間は，ある時は情報をもたらす恩恵に預かるが，時にはその巨大な濁流に呑み込まれ流され，意図せずして情報という危うげで奔放

な大海のなかに漂っている状態にあると表現し得るのである。情報が新たな情報を生み出し、複雑性が更に多くの複雑性を生む。リフキンの言葉を借用すれば、「いよいよ迷宮のように複雑な関係をつくりあげ、システム全体の複雑性を高め⁵⁴⁾」たといえる。そして、あろうことか、皮肉にもこれこそが我々がいま生きている「高度情報社会」の顕著な特徴の一つでもある。

6. 「情報過剰」と「人間」の問題

丁度、限度をわきまえない栄養の過剰摂取が我々の身体を非常に害し、或いは又、植物にとって必要不可欠な水や肥料の与え過ぎが逆に草花の生育に悪影響を及ぼし、ついには枯らしてしまうことを我々は日常的に経験している。

この点については、情報の供給と消費についてもほぼ同様のことがいえる。トフラーは、情報を消化して自分のものにする人間の能力には、もともと一定の限界があり、情報を区分しそれを抽象化し、また様々な方法で“符号を付ける”ことによって、その能力的限界を引き伸ばせないことはないが、我々の能力に限界があることは種々のデータからも明白であると述べている⁵⁵⁾。そして、彼はまた情報過重荷が様々な精神病と関連があることを示唆し、「消化しきれないほどの情報を詰め込むと、精神障害を起こすことがある」と言い切るミラー (Miller, J. G.) の言葉を紹介している⁵⁶⁾。先に示した郵政省の「情報流通センサス」においても、発信されている情報量が著しく伸びているのに比べ、実際に消費された情報量の伸びは小さく、選択可能な情報量を下回っている状況からみると、人間の情報を消費する能力には一定の限界があるとするトフラーの言説を肯定せざるを得ない。同時に、「センサス」は我が国において国民が消化（摂取）できる情報量を遥かに上回る膨大な情報が過剰に生産され提供されており、この傾向が年々拡大し続けていることを明確に証明しているのであ

る。それから又、大橋氏の説明によれば、動物実験のレベルでは不適合な物質の入力に起因する中毒、例えば食中毒（food poisoning）と同じような意味で、環境からの不適合な情報入力に起因する中毒、即ち、“情報中毒”（information poisoning）、或いは“情報失調”（information imbalance 又は malinformation）と呼べるような脳の障害が惹き起こされる可能性があることがわかり、このような環境不適合現象は、人間についても例外なく成立する恐れがあるという立場をとることが安全であろう、と述べている⁵⁷⁾。

さて、以下では、高度情報社会における情報過剰の問題を把握するにあたり、主に、情報過剰と「人間」的な側面との関係の問題について、次の四つの点に集約して考えてみたい。

先ず第一に、情報量が爆発的に増大し、各種のメディアの利用によって従来よりも遥かに多くの情報が入手可能となるが、逆に本当に必要とする情報をキャッチできないという、いわゆる「パラドックス（逆説）」が起きる、という問題である。

一般的に、人間の「世界についての情報を受けとめる認識装置は、身体に具わった感覚器官にまず依存している。世界のあり方をより正確に知り、予測する。また、その知識によって、自然を改変して、われわれにとってより安全な生活世界を創り出す。このような営みは、もちろんわれわれの環境についての認識を深めるだけでなく、新たな世界との関係を創り出すことになる⁵⁸⁾」。ところが、情報量が爆発的に増大すればするほど、情報の不明瞭性、不確実性ないし不真実性も増大し、「情報における意味の拡散は、現実の曖昧性を増大させ、さらにノイズを氾濫させる⁵⁹⁾」。つまり、情報量の増大は意味の形成ではなく、ノイズを堆積していくことなのである。無目的で、またある時は無神経に流される情報は特にそうである。従って、高度情報社会というのは雑音社会という側面を有しているといえ、このような側面は現実的に考えても否定し難い。静寂な世界又は静謐と荘厳さを秘めた空間という表現方法を用いるには途方もなく不似合いな社会

になっているのである。

クラブにいわせれば、ノイズは「混乱した世界において、コミュニケーションを損ない意味を混乱させるものの総称である。それは、取るに足らない敵どころか、意味と共感を妨害しようとする、しつこい敵の手先のようにさえみえてくる⁶⁰⁾」としている。また、彼は情報過剰が社会にもたらす帰結の主要なものとして、意思決定の遅滞、コンセンサスの遅滞、そして意味の遅滞と不合理性の増大という点を挙げているが⁶¹⁾、真偽が明確でない情報量の増大は人間の判断を大きく狂わせたり、不要な混乱を生み出す危険性が大きい。その顕著な例は過去に起きた戦争や地震等の災害、或いは多数の人命を突然奪う事故発生時の状況を思い起せば事足りるであろう。また、やや次元が異なるが、育児情報が多いために若い母親を不安に陥れ、場合によっては過敏な母親が育児ノイローゼになったり、教育関連情報が過剰なために子どもたちを無理にせかし、過度な要求を強いた結果、子どもの社会性の形成を妨げていることは多分にあり得ることであろう。

かくして、我々の社会はもはや人間として生きるために、或いは主体的・自立的な生き方を決めるために本当に適切に必要な情報は、あたかも霧の中であって漠然としており、実のところ誰の手にもとどかない（たどりつけない）か、もしかしたら喪失しているのかもしれない。真実が容易に入手できない。現実を反映していない。確かな手ごたえを感じないのである。後藤氏の指摘によると、病理的な「うわさの発生は情報の量ではなく、むしろ適切な情報の不足という質的な要因に依存した現象⁶²⁾」であるという。このようなことから、現代という時代はマッキベンの著書名のごとく「情報喪失の時代」(the Age of Missing Information⁶³⁾)なのだといえるだろう。アタリの次の言葉は実には的確である。つまり、「『真なる』情報は『偽の』情報よりも多くの情報を含むということが出来る。だが、一方で真理は、『真なる』情報が挿入される論理に依存している⁶⁴⁾」という。彼のこの指摘は、高度情報社会と称される現代社会にのみ妥当するも

のではない。人間社会の営みのあらゆる時代において、例え情報量の過少な時代であっても、まったく見事に勝利を得ている。

第二に、情報量が爆発的に増大すればするほど、社会における自己喪失感、自己の無力感が深まる、という問題である。

我々は、自己の意志や必要性と無関係に、あまりに消化しきれない膨大な量の情報に、「情報論的な宇宙がぼくたちの身体を皮膜のように包み込んでいるのであり、むしろ身体もそうした情報の波動へとつながる一つの端末にすぎない⁶⁵⁾」のではないかと、社会における自分の位置がいつも浮動し、曖昧となり、不明瞭となる。いまものを見ている自分、思考している自分は“何もわかってはいない”と社会における自己の存在を無力でとるに足りない存在に感じ、限りなく不安と虚しさを覚える。これまで自信をもっていった自己の信念や信条といったものもぐらつきはじめ、アイデンティティの喪失を味わいはじめている。「自分がどう生きるか」、「自分が何をしたいか」など人生について自問自答する機会が欠落し、延いてはこれから開始すべき未知の世界への積極的な挑戦からあっさり降りてしまう。今日指摘されているアイデンティティの喪失や危機は、まはや青年期特有の事柄ではなくなっている。現代社会において生きているすべての人間に通じるのであり、絶対的な価値も解体されたいま、現実に対して我々は如何に対応すべきかと戸惑うことが日常化しつつある。やや極限すれば、膨大な情報量による“人間性”の圧殺である。

世界でも著名な精神科医の一人であるメイの言葉で表現すれば次のようにいえる。「今日、たいていの人々は、存在としての自己がいかにとるに足らぬもの、また非力なものであるかを思い知らされる材料にこと欠かない⁶⁶⁾」。「私たちは、人間としての卑小感、微力感をいやというほど味わわされ、個我は大洋の波浪に押し流される砂粒のごとく、非力な存在に化してしまった⁶⁷⁾」といえよう。取り分け、一概には明言できないが、このような自己の非力な存在感、微力感はワープロやパソコンなどのメディアを職場、学校及び家庭などで積極的に活用し、情報ネットワークへ自由

自在にアクセスして情報交流や情報共有を行える人たちよりも、新しいメディアの操作に困難さを感じていたり、苦手としている人（ないし一定の集団や層）に広がりつつあるように思われる。このような問題は、むしろ高度情報社会そのものの「影」の部分でもあるが、量的に情報が溢れているとはいえ、個人的な立場からする情報所有量は均一ではなく、逆に不均質で不平等化が進む傾向にある。情報や知識の、いわゆる「持てる者」と「持たざる者」との間に格差が生じ、高度情報化の進展はこの傾向に一層拍車をかけつつある。従って、現状のまま高度情報化が進展すれば、一部の人（ないし一定の集団や層）が高度情報社会から取り残される恐れを秘めていると考えられる。

いずれにしろ、社会における人間の自己喪失感、自己の無力感が深まることは非常に危険であるといえる。何故なら、自分がとるに足りない存在にみえ、自己の真剣な選択ないし決定行動などが日常生活のなかで「他者」に殆ど影響を与えないように思えば、自分の否定的側面が少しずつ拡大し、延いては自己の価値や人間の尊厳といった事柄にも複雑な問題を引き起こし、精神的健康、更には肉体的健康にも悪影響を与える可能性が大きいからである。そして又、自己の姿を失った生き方は他者との孤立感をもたらし、孤独な人間が歪んで乱れ飛ぶ膨大な情報のなかで、迷路に迷い込み迷子と化して途方に暮れ、どこかに安らぎ求めて彷徨う。だが、彷徨って泣き叫ぶだけではない。個人の孤独化は、時として理性を狂わし、社会的な困難に遭遇した場合には「個人の解決能力に限界があるために、その能力の上限を超えると犯罪・自殺・薬物中毒・非行などの社会病理現象発生につながる⁶⁸⁾」恐れがあるといわれている。

第三に、情報量が過剰であり消化不可能な量にもかかわらず、飽きもせず、いわゆる“情報を食べずにはおれない”症状をきたす人たちをつくり出す、という問題である。

一般的に考えて、我々は身の回りに消化しきれない膨大な量の情報が降り注いでいる場合、流れている大量の情報のなかから、自分にとって必要

な情報、差し当り重要と思われる情報から消化し、殆ど不必要と判断された情報は切り捨てたり排除することが多いだろう。ところが、なかには情報からの疎外感を解消するため、或いは“情報に乗り遅れる”という強い恐怖心から、過食症と呼ばれる摂食障害に似た状態を呈する人たちがいる。ワーマンは、このような症状を「情報過食症」(information bulimia)と称している⁶⁹⁾。確かに、情報への欲求度や必要度は、一人ひとりの性格、ライフスタイル、行動範囲及び能力（判断能力、識別能力及び決断力等）など多くの要因によって異なるし、正確で明らかに有益な情報なら、多少消化しきれそうにない量であっても消化しようと努力することは日常茶飯事である。また、状況によっては自ら積極的に情報を追い求めたり、「のぞかないではいられない強迫的な情報飢餓感⁷⁰⁾」に迫られることは誰もが経験するところであろう。しかし、異常な恐怖感や不安感から、無批判にありとあらゆる情報を追いかけて消化しなければ気が済まないとか、又は有益で重要な情報をいつも取り逃がして自分だけが不利益を被っていると考え、一日の自分の情報消化量に対して慢性的に不満感を抱き、いつも情報を求めてふらつき溺れているとすれば、やはり正常な人間行動とはいえないのである。

但し、一言付言すると、むろん、今日では絶えず正確で新たな情報を沢山の時間と金銭を費やして求めざるを得ない状況にあることも否定し難いし、この点は特定の人間の特殊な事情であるともいえない。その理由の一つとして、情報量の急激な増大が情報の価値そのものを急速に低減(消失)させてしまう可能性を有しているからである。通常、このような場合の情報価値の低減(消失)といえば、よく引き合いに出される例ではあるが、ひどく空腹な人間にとって、目の前に出された一切れのパンは何物にも替えがたい絶大な価値を持つが、フル・コースを堪能した後の一切れのパンには殆ど興味をあらわさないのと同じである、という形で説明される。ここでいう情報の価値の低減(消失)は、少しニュアンスが異なるかもしれないが、世界の真実を伝えているはずの情報が、あまりに過剰であるがゆ

えにきれぎれバラバラに断片化した情報しか入手できず、しかもその情報が相互に関連を失っているために、情報一つひとつの価値の正確性や信頼性が薄められている。つまり、本当の世界の全体像を見えないものになっているために、結局のところ、全体像を明確に把握しようとすればするほど、正確で信頼性の高い情報を求めて東奔西走する羽目に至るということである。

我々は情報量が爆発的に増大している複雑で巨大な現代社会、そして刻々と変化する——時には緩慢に、そして時には急激に——社会は、もう一人の個人では正確でかつ明確に把握するのが限りなく困難になっている現状を常に思い知らされる。全貌が見透せないのである。情報量の増大は「知」を蓄積させたり、新たな「知」の可能性を開かずに、かえって「知」を拡散させてしまっているといえるのである。

そして第四に、情報量が爆発的に増大すればするほど、人間の興味や好奇心を高め、欲望 (desire) を刺激しそれを増幅させ、本当の充足感、満足感を限りなく減少させていく、という問題である。

情報はそのまま危険な誘惑者ともなりうる。メディアが日常生活の隅々まで浸透している現代社会では、次々と新しいモノが生み出され、メディアを通して絶え間なくその所在を伝える情報が提供されているような状況にある。人間の幸福、自分の幸福とはまったく無関係かもしれないとしてもである。このような意味で、高度情報社会というのは人間の好奇心を高め、欲望を刺激し渴きをあおり、欲望を沸き立たせ、かき立てる社会でもあろう。日常の生活が様々な欲望のうちに没し戯れているだけとすれば、かつ又本来自己の内から生じた欲望ではなく他者の欲望が自己の内に無自覚的に入り込んでいるだけとすれば、到底、自分の真の「幸福」、本当の「生活の質」の向上とはほど遠い充足感、満足感なき心の貧しい生活がそこに繰り広げられることになることは、もはや異論の余地を残していないといえよう。

町沢氏は「私たちの表面的な価値、地位、学歴、容貌、ファッション、

知名度の側面は情報になりやすく、その情報に基づいて人を評価し、評価されることは当然考えられる。そして、内面はとり残されることになる。情報社会、消費社会は人の欲望をかきたてる社会であり、欲望がかきたてられればかきたてられるほど、私たちは欲望のコントロールを失うようにしむけられる⁷¹⁾。「欲望や衝動を思う存分に発散させ、スキャンダルやトピックとしてアピールすることだけをねらった出来事や情報が現代社会にあふれており、成熟した人間よりも未成熟な人間であることの方が好まれるとすら言える⁷²⁾」と鋭く分析している。欲望のコントロールを失えば、欲望の肥大化は止まることを知らず、人間は心から満たされた気持ち、満足感など到底感じ得ない。欲望が満たされると、また新たな欲望が生まれ徐々に肥大化する。これは愚かしさの積み重ねである。仮に、一時的にしろ、満足感、充足感に浸ったとしても、それは見せかけであり錯覚であり空虚な幻影であると考えられる。最終的には、津田氏の言葉を借用して表現すれば、今日、無数の欲望が織りなす欲望の体系は、日々、ますます複雑化し多様化していくが、このような状況の「最大の問題点は、われわれをして自らの欲望について反省する機会をなかなか与えてくれないこと⁷³⁾」であるといえよう。

それから又、成熟した人間が主体的、自立的に生きていなければ、知らず知らずのうちに、色々なレベルの「情報操作」⁷⁴⁾に惑わされて被害を被ることにもなりかねない。政治の領域における国民に対する情報操作、経済活動に伴う悪質な情報操作、例えば、ある企業が情報を都合よく意図的に捏造したり不都合な情報を隠匿したり、逆に自社の商品を不当に誇大公告したり都合のよい情報だけを開示するという形での情報操作に惑わされたり、或いは又、身近な一部の人間の利益のための陰湿で巧妙な情報操作の罠に巻き込まれたり、落とされ涙することにもなるのである。確かに、情報を操作したり、情報で操作されることは、情報そのものが大きな価値を有する高度情報社会に限った事柄ではない。歴史的にはかなりの“伝統”をもっていることは、もはや周知の事実であろう。それにしても、

メディアが日常生活の隅々まで浸透している現代社会では、不特定多数の国民に対して影響を与える新聞、ラジオ及びテレビなどのメディアを利用しての悪質な情報操作が相変わらずかなりの割合で行われていると考えられるのである。

以上、ここでは、主に「人間」的な側面との関連で高度情報社会における情報過剰の問題を考察してみた。周知のように、本来、情報は動態的であり、一種の「秩序」を形成するために役立つはずのものである。しかし、現在の状況を凝視すれば、絶えず人間を、そして人間社会を取り巻き、渦巻き溢れている多様性に富んだ膨大な量の情報に、「秩序」よりもむしろ「無秩序」の可能性を高めているようにもとれる。「秩序を形成するはずの情報が無秩序を促進するという、『情報エントロピー』の奇妙な症状を起こして⁷⁵⁾」おり、もし、人間社会に有害で多分に不正確な情報、歪んで乱れ飛ぶ情報が蔓延し無限に自己増殖すれば、社会システムの「秩序」そのものが崩壊し、無用な不安と混乱を招く危険性が極めて大きいことは誰の目にも明らかである。

現代的な神話といえる情報崇拜、コンピュータ崇拜者の野望に対して果敢に挑戦し、その虚構をあばき出した意欲的な著書『コンピュータの神話学』(The Cult of Information)を著わしたローザックは、「活力にあふれた民主主義において、重要なのは情報の量ではなく、情報の質なのである⁷⁶⁾」と指摘している。この指摘は、この上なく当然のことと考えられるのだが、高度情報社会に生きる我々には実に重みのある指摘であるといえよう。

7. 「情報過剰」への対応と課題

今日の激変し肥大化する情報環境は、我々すべてを幾重にも包み込み、各種のメディアは日常の個人的、社会的な出来事のすべてに深くかかわっている。従って、どのような状況にあっても日々の生活を営んでいる限り、

ひとり超然たる態度や客観的な姿勢を取ることは許されない。

そして、現在のところ、急激に増大し洪水となって溢れている膨大な情報をせき止める然したる妙案や手段も見当らない。近年では、“情報の放火魔”的な存在も増えている。情報の放火魔はかつてにどんどん情報の火をつけて、後始末など毛頭考えもせず、さっさと逃げ去ってしまう。こうなると、もうどうにも仕様がな。そして、情報源がまったく曖昧にもかかわらず、その情報が独り歩きし新たな「うわさ」や「ゴシップ」として流布していくようになるのである。それどころか、「人間が自分自身の感覚で認識した本物の世界の方がリアリティを失い、メディアの中の作られた虚像の方がいつの間にか人々の意識の中で大きな位置を占め、実在感を持ってしまうという混乱は、今日のメディア社会の中で広く見られる⁷⁷⁾」。今日では、マルチメディアの普及、利用の急速な拡大に伴って、虚構の世界の幻影に惑わされて自己と生き生きとしたリアリティを喪失するという危惧や懸念がより一層高まりつつある。情報が多ということ、それだけ選択肢が多く自由度が増すということであり、情報やメディアによって人間は多くの“夢”をみることができ、それと裏腹に種々の混乱、不安及び危機に遭遇することになる。

しかし、だからといって、各種のメディアによって提供されるどんな情報も虚偽として信頼せず、あらゆる情報から背を向けて拒否していたのでは、到底、人間としての生活は成り立たない。人間社会の営みの過程に登場する情報は、すべて人間の手によってつくられている。情報なくして開放系であり動的なシステムとしての人間社会の存続及び発展、更には新たな形成も生み出せない。つまり、人間であるということは、情報から完全に逃れることのできない、かつ又情報と切り離すことのできない存在なのである⁷⁸⁾。

そこで、現代社会の「情報過剰」という状況のなかにあって、我々是如何に対応すべきなのだろうか。今日では、如何にして広い範囲から様々な情報を沢山収集するかということより、激流と化して流れている大量で玉

石混淆の情報のなかから、より正確で有益な情報をどのように選択・判断し、どのようにそれを有効に利用・活用するかという人間の能力が問われている時代でもある。以下では、この点について簡潔ながら考えてみたい。そして、如何に対応すべきかを考えることが、即ち、我々に課された今日の課題でもある。

先ず、情報の受信者がより主体性、自立性を持って確固とした目的のもとに、情報を取捨選択しなければならないということである。特に、現代社会ではテレビやラジオに代表されるように、一方的にあらかじめ加工された精度の高い情報が頻繁に流されているために、主体的な情報選択の努力を怠る傾向が強まったり、人間一人ひとりが有している感性や感情が弛緩してそれが慢性化し、情報の価値の判断能力や識別能力が鈍化する危険性が危惧されている。従って、このことが現実化しないためにも、社会システムを構成・形成する一人の人間として、情報選択のための明確で強力な意志が必要であり、情報を見極める眼を不断から養うことが不可欠である。人間が歴大な溢れる情報に溺れ、「自分で考え、自分で表現する」ことを放棄して、社会を流れている情報という見えない糸で踊らされている“マリオネット”となれば、まことに滑稽であり、実に悲しい。メイはいう。「最も深いレベルにおいては、私たちがどんな時代に生きているかということは問題にならない。基本となる問題は、自己への気づきおよび自分の住んでいる時代においてその個人が、いかにして自らの決断を経て内なる自由に達し、自分自身の内なる誠実さに従って生きることができるかということである⁷⁹⁾」と。情報を捨てることに躊躇し、しっかりとした選り分けの作業にはいりたがらない人たちも見受けられるが、やはり勇気をもって、無用で不必要な情報を退け、自分にとって適正な「情報秩序」を作り上げること⁸⁰⁾が是非とも必要である。

それから、情報の提供者に対するチェック機能、情報の真偽を確認するチェック機能を果たす社会的機関が重要であるのはむろんのこと、人間社会を悪い方向へ導いたり、また、思わぬ落とし穴にはめて個人を傷つけたり、

悲惨な畏にかけられるような「情報操作」が行われないように、いつも倫理的な視点から一人ひとりが目を光らせるということが必要である。いま一度、情報の意味を、情報を流す真の目的を、提供する側と提供される側との双方が確認する時期を迎えている。情報過剰という現状を突き崩すためにも、確認作業を意識的、積極的に遂行することを怠ってはならない。前川氏は、「情報倫理」の必要性を強く説いているが⁸¹⁾、21世紀高度情報社会では情報にかかわる人間としての道徳観、倫理観という精神的な規範が、一層重要視される社会でなければならない。

将来的に、このまま情報量が爆発的に増大し、それを提供しコントロールする情報技術が進化したとしても、究極的には一人ひとりの「情報」に対する姿勢・態度にかかっているとわざるをえない。現代の、そして未来に生きる人間の一人ひとりが物事の本質を見抜き真実をくみ取る能力、かつ又価値のある情報、意味のある情報を、いわゆる“かぎわけ”識別できる能力を充分備え、そしてメディアを貧困な仕方を利用しなければ、人間が情報とメディアとの奴隷とはならず、氾濫し渦巻き溢れている情報にも、決して臆することのない21世紀型社会システムを構築できるのではないかと、我々は考えている。

なお、従来から、学校教育のみならず社会教育の領域での、いわゆる「情報教育」ないし「情報適応教育」の必要性も強く叫ばれているが、パソコンなどメディア操作とともに、情報選択の能力や情報の価値の判断能力等の向上を意図した体系的な教育は依然として満足な形で実施されているとはいい難く、実践的、体系的な教育を行うために克服すべき問題も多いのが実情であるといえる。

8. 結 語——若干の展望——

今日、話題を独占しているとも言えるインターネット上では、時間と空間を超えて誰でも自由に平等の立場(=対等な立場)で、世界中のインター

ネット利用者とコミュニケーションが可能となり、現在我が身を置いている地域社会とは異なった「バーチャルコミュニティ」の住人となって自由に意見を交換し情報を共有できる。このような意味からも、現代は人間社会というシステムが地球上に形成されて以来と表現してもよいほどの大きな社会変化を経験中であり、社会システムの転換期にあるといえる。我々の現実世界は確実に移り変わっているのである。

しかしながら、既述したように、いま人間が病み、社会が病み、そして時代が病んでいることは誰もが知っている。「過剰富裕社会⁸²⁾」とも捉えられる現代社会は、あらゆる方向で蝕まれ、破滅ないし破局を予感する警報が鳴り続けているのも事実である。人類はいつこの警報を停止させることができるのか、何が（誰が）停止させるのか、現在のところ確固たる確証がないといってよい。

本稿では、いま警報が鳴り始め、その音が高まりつつある現代社会の「情報過剰」という現象、そしてこの情報過剰に伴う諸問題を考察してきたが、今回の考察を通して情報量の爆発的な増大は、人間に、そして社会の隅々に至るまで非常に深刻な負の影響をもたらしていることが明らかとなった。更に、今後におけるマルチメディアの普及、利用が本格化するにつれて、「高度情報社会」の様々な問題が吹き出してくることは容易に予想し得る。最近では、インターネットの「光」の側面だけをクローズアップさせて、華麗な未来社会像が数多く述べられ紹介されているが、例えば、インターネットを利用すれば、自ら創った情報を国境を超えて瞬時に発信できることから、「匿名性」の下で面白半分は無責任極まる情報を氾濫させ、意図的に虚情報や誤情報を世界中にばらまくという芸当ができる。取り分け、世界中の人々が情報ネットワークで連結されるということは、その中に身をおくだけで、自分の知らない遠く離れた場所で発生した情報犯罪にまったく気づかないうちにつらなっていたり、コンピュータの不正使用によるネットワーク犯罪に巻き込まれるという状況にさらされかねないのである。このような犯罪はネットワークを悪用した新しいタイプの知能犯罪だけに

実に厄介であるが、先進国において確実に増加している。その他に、犯罪とはいえないまでも、広範囲な「情報操作」の可能性も飛躍的に高まる。そして更には、情報ネットワークによって生み出されたサイバースペース（cyberspace：電腦空間／電子空間）という空間においても、将来的に我々が意図しない、或いは常識的には到底想定し得ぬ深刻な事態が発生するであろうことは想像に難くないのである。なお、これらの諸問題は、今回の「情報過剰」の問題というよりも、「高度情報社会」そのものの問題であることから、後日、改めて別稿で検討を試みてみるつもりである。

いずれにしろ、我々がどのようにもがこうと、21世紀高度情報社会の到来は免れない。確実にやってくるのである。21世紀高度情報社会がコンピュータを中枢とした電子管理社会、又は「電子封建主義」（エレクトロニック・フェミタリズム）にならないという保障はない⁸³⁾としても、何よりも、現段階では高度情報社会の「影」の部分についての認識が極めて不十分な気がしてならない。生きているものの「生」そのものが奪われる恐れへの認識がないのである。

本稿では、不十分なながらも、今日の「情報過剰」という状況のなかにあって、我々是如何に対応すべきかについても述べたが、最も喫緊の課題のひとつは、何と云っても、先ず高度情報社会の「影」の部分についての透徹した認識を如何にして高めるかにあると考える。

[4. - 8.]

注35) Naisbitt, J., *Global Paradox : The Bigger the World Economy, the more Powerfuf its Smallest Players*, New York : Avon, 1994, p. 360.

36) 清水克雄『文化の変容——脅かされる知と人間——』, 人文書院, 1987年, 17頁。

37) 中村雄二郎『21世紀問題群——人類はどこへ行くのか——』(21世紀問題群ボックス①), 岩波書店, 1995年, 63頁。

38) 中村雄二郎『知の変貌——構造的知性のために——』, 弘文堂, 1978年, 35-38頁。

- 39) 岸本晴雄「生活と経験」岸本・津田『現代人間論への視座——文化・生活・意味——』, 法律文化社, 1993年, 101頁。
- 40) 山岸健『社会学の文脈と位相——人間・生活・都市・芸術・服装・身体——』, 慶應通信, 1982年, 309頁。
- 41) 大田堯「地球と人類」教育科学研究会『現代社会と教育』編集委員会編『現代社会と教育①——現代と人間——』, 大月書店, 1993年, 22頁。なお、「教育」にかかわる現状や様々な問題に関しては, 教育科学研究会『現代社会と教育』編集委員会編『現代社会と教育』全六巻が興味深い指摘を行っており, 是非参照されたい。
- 42) Dubos, R., *The Wooing of Earth : New Perspectives on Man's Use of Nature*, New York : Charles Scribner's Sons, 1980 (長野訳『地球への求愛』, 思索社, 1990年, 38頁)。
- 43) *Ibid.*, (同訳書, 182頁)。なお, デュボス氏は, 1982年2月に死亡している。
- 44) この点については, 拙著『システムと情報』, 前掲書, 第5章を参照されたい。
- 45) 拙著『システムと情報』, 前掲書, 60-61頁。
- 46) Postman, N., *Technopoly : The Surrender of Culture to Technology*, New York : Alfred A. Knopf, 1993, p. 63.
- 47) *Ibid.*, p. 70. ポストマンは, 「情報は文化の新しい神であると言い触らしながらビンから出てきた魔神は詐欺師だった」(p. 60)とかなり手厳しい表現を用いている。
- 48) Baudrillard, J., *Simulacres et simulation*, Editions Galilée, Paris, 1981 (竹原訳『シミュラクルとシミュレーション』, 法政大学出版局, 1984年, 106頁)。
- 49) 仲本秀四郎『情報を考える』, 丸善, 1993年, 65頁。
- 50) Postman, N., *op. cit.*, p. 62.
- 51) Wurman, R. S., *Infomationn Anxiety*, New York : Dell Publishing Group, 1989, p. 32 and p. 34.
- 52) 「原発情報量」など各情報量の概念を含めて, 「流通情報センサス」全体に関する詳細については, 郵政省編『通信白書』(平成7年版), 前掲書, 第3章第1節を, また, 我が国の「家庭の情報化」指標については第4章第1節を参照されたい。
- 53) Pascal, B., 渡辺訳『パンセ——冥想録への誘い——』, 社会思想社, 1966年, 113頁。
- 54) Rifkin, J., *Time Wars : The Primary Conflict in Human History*, 1987 (松田訳『タイムウォーズ——時間意識の第四の革命——』, 早川書房, 1989年, 232頁)。

- 55) Toffler, A., *Future Shock*, New York : Random House, 1970 (徳山訳『未来の衝撃——激変する社会にどう対応するか——』, 実業之日本社, 1970年, 412頁).
- 56) *Ibid.*, (同訳書, 415頁).
- 57) 大橋力『情報環境学』, 朝倉書店, 1989年, 12-18頁.
- 58) 谷泰「現代文明と聖なるもの」河合他編集『新しいコスモロジー』(岩波講座 宗教と科学 9), 岩波書店, 1993年, 25頁.
- 59) 三重野卓「情報化の実際と生活様式の多様性」白倉幸男編『現代の社会システム』, 学術図書出版社, 1991年, 227頁.
- 60) Klapp, O. E., *Opening and Closing : Strategies of Information Adaption in Society*, Cambridge : Cambridge University Press, 1978(小林・川浦『情報エントロピー——開放化と閉鎖化の適応戦略——』, 新評論, 1983年, 10頁).
- 61) *Ibid.*, (同訳書, 122-136頁).
- 62) 後藤将之「うわさ・虚報・ゴシップ」有山・津金澤編『現代メディアを学ぶ人のために』, 世界思想社, 1995年, 115頁.
- 63) McKibben, B., *The Age of Missing Information*, London : Marsh & Sheil, 1992.
- 64) Attali, J., *La parole et l'outil*, Palis, 1979 (平田・斉藤訳『情報とエネルギーの人間科学——言葉と道具——』, 日本評論社, 1983年, 88頁).
- 65) 室井尚『情報宇宙論』, 岩波書店, 1991年, 105頁.
- 66) May, R., *Man's Search for Himself*, New York : W. W. Norton & Company, 1953 (小野他訳『失われし自己をもとめて [改訂版]』, 誠信書房, 1995年, 57頁).
- 67) *Ibid.*, (同訳書, 56頁).
- 68) 江口貴康「都市からの展望」鈴木他編『社会学と現代社会』, 恒星社厚生閣, 1993年, 225頁.
- 69) Wurman, R. S., *op. cit.*, p. 201.
- 70) 新睦人「情報社会と日常生活」濱口恵俊編著『高度情報社会と日本のゆくえ』, 前掲書, 117頁.
- 71) 町沢静夫「ボーダーラインの文化人類学的考察」大平・町沢編『精神医学と文化人類学』, 金剛出版, 1988年, 191頁.
- 72) 同上書, 192頁.
- 73) 津田雅夫「欲望と変容」岸本・津田『現代人間論への視座——文化・生活・意味——』, 前掲書, 138頁.
- 74) 「情報操作」に関しては, 松尾博文「情報操作社会の理論序説」青井和夫監修『コミュニケーション社会学』(ライブラリ社会学 7), サイエンス社, 1985年, 103-149頁, 塚本三夫「『高度情報社会』における情報操作

の問題——マス・メディアの総合情報産業化は何をもたらすか——」石坂・桂・杉山編『メディアと情報化の現在』, 前掲書, 198-216頁及び川上和久『情報操作のトリック——その歴史と方法——』, 講談社, 1994年等を参照されたい。

- 75) 新睦人「情報社会と日常生活」濱口恵俊編著『高度情報社会と日本のゆくえ』, 前掲書, 117頁。
- 76) Roszak, T., *The Cult of Information : The Folklore of Computers and the True Art of Thinking*, New York : Pantheon Books, 1986 (成定・荒井訳『コンピュータの神話学』, 朝日新聞社, 1989年, 227-228頁)。
- 77) 清水克雄『文化の変容』, 前掲書, 59頁。
- 78) 拙著『システムと情報』, 前掲書, 57-58頁。
- 79) May, R., *op. cit.* (同訳書, 316頁)。
- 80) 濱口恵俊「高度情報社会における『人間』の問題」濱口恵俊編著『高度情報社会と日本のゆくえ』, 前掲書, 200頁。
- 81) この点については, 前川良博『情報処理と職業倫理』, 日刊工業新聞社, 1989年を参照されたい。
- 82) 「過剰富裕社会」に関しては, 佐貫浩「アジアと日本——共生のための社会・文化・教育を考える——」教育科学研究会『現代社会と教育』編集委員会編『現代社会と教育①——現代と人間——』, 前掲書, 43-54頁を参照されたい。
- 83) 高瀬浄『エコノミーとソシオロジー——象徴社会からの知的回帰——』, 文眞堂, 1989年, 61頁。

(完 結)